

## 19. 肝臓の胆管細胞癌(Cholangiocarcinoma in liver)

|       |          |
|-------|----------|
| 誌名    | 鶏病研究会報   |
| ISSN  | 0285709X |
| 著者名   | 阪脇, 廣美   |
| 発行元   |          |
| 巻/号   | 39巻3号    |
| 掲載ページ | p. 152   |
| 発行年月  | 2003年11月 |

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



19. 肝臓の胆管細胞癌 (Cholangiocarcinoma in liver)

キーワード：採卵用成鶏，胆管細胞癌

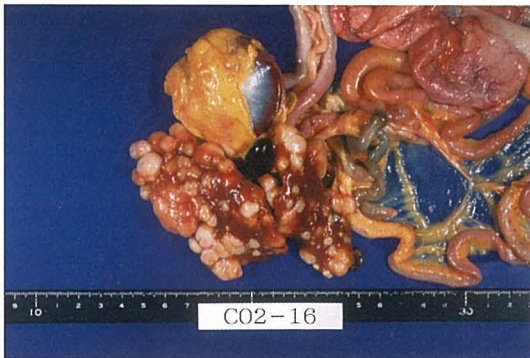


写真 1. 肝臓全体にわたり白色～黄白色で光沢のある直径1～25 mm 大の球状で硬度のある腫瘤を多数認めた。表面のみでなく実質内にも認められた。

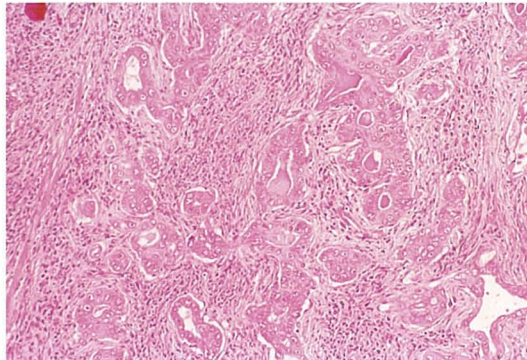


写真 2. 腫瘤は豊富な結合組織と腺管様構造をとる細胞からなり、間質部分は線維芽細胞様のクロマチンに富んだ小さな核を持つ細胞で構成されている。HE 染色。

動物：採卵鶏，雌，成鶏

発生状況および症状：2002年6月に処理した1農場22,293羽中，腫瘍のみられた169羽のうちの1羽。生体検査では特に異常は認められなかった。

肉眼所見：肝臓全体にわたり白色から黄白色で光沢のある直径1～25 mm 大の球状で硬度のある腫瘤を多数認めた。断面は白色から黄白色，充実性で無構造であり，中心にわずかに壊死を認めるものもあった（写真1）。他に卵管の卵白分泌部に直径10 mm の乳白色腫瘤を一個認め，その周囲に直径約2 mm の腫瘤の散発が認められた。その他の臓器等に異常は認められなかった。

組織所見：肝臓の腫瘤は豊富な結合組織と腺管様構造から構成されていた。腺管を構成する細胞は立方状から扁平で，エオジン好性の豊富な細胞質を持ち，核は淡明で円形から類円型，1～数個の核小体を有していた。異型性や分裂像も認めた。腺管様構造の内腔にエオジン好性の粘液様物を認めるものもあった。間質部分はクロマチンに富んだ小さな核を持つ紡錘形の細胞で構成され，周辺にリンパ球の集簇もみられた（写真2）。卵管の腫瘤は立方状の豊富な細胞質を有する細胞が腺管様構造を示し，小葉状に区分されていた。細胞質内に好酸性の顆粒が豊富な部分と，顆粒を持たない部分があった。

抗サイトケラチン抗体を用いた免疫染色では，肝臓の腺管様構造をとる腫瘍細胞が陽性を示し，卵管の腫瘍細胞は陰性であった。また，抗オボアルブミン抗体を用いた免疫染色では肝臓腫瘤部は陰性で，卵管腫瘤部では陽性を示す顆粒が多数認められた。

解説：本症例は，肉眼所見で腫瘤が肝臓と卵管以外の他の臓器には認められなかったこと，肝臓腫瘤部の組織所見で豊富な結合組織と異型性が強い細胞で構成された不整で不規則な管腔を形成する腺構造とさらに粘液産生も認められたことから，卵管もしくは胆管の腺癌を疑った。卵管の腫瘍細胞にみられる顆粒が無いことや，免疫染色の染色性などから肝臓の腫瘤は卵管の腫瘤とは異なる組織由来の腫瘍と考え，肝臓の腫瘤は胆管細胞癌と診断した。

成書では，胆管細胞癌は肝内胆管上皮に由来するよく分化した腺癌で，円柱状ないし立方状の細胞が不規則な管腔を形成し，あるいは不完全な腺腔をつくる。しばしば粘液を産生するが，胆汁の蓄積はない。間質結合組織の量は一般に多いのが特徴で，厚い線維性結合組織の中に硬癌状に増殖するとされている。過去の病理部会における発表症例では，第38回の発表で肝臓の腫瘤が胆管細胞癌と診断されているものがある。

著者：阪協廣美 (Hiromi Sakawaki)，群馬県中央食肉衛生検査所，〒370-1103 群馬県佐波郡玉村町樋越 305-7